

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

第11次連合ボランティア報告

わたしたち、第11次連合ボランティアは、3月11日から6月17日で100日目を迎えたということと、連合ボランティアが20,000人をちょうど超えたという節目でもあった。住田ベースキャンプを出発し、大船渡社協ボランティアセンターに行き、作業内容が言い渡される。初日は側溝掃除であった。社協から徒歩5分程度であったが、100日たった今でも、道中の至る場所に津波の爪跡が残されていた。

側溝作業は、大変であった。何が一番たいへんであったかという、側溝のドロの中の魚がかなりの悪臭を放っていた。防塵マスクをしていても、においは防げず、それでも作業の手は休まることなく動き続けた。夜になっても、その臭いが鼻をつく。野球場の横の側溝であり、グラウンドの土も見事に流され、側溝の深さ以上の泥に覆い尽くされていた。しかも、流れる場所であるはずのところに、1m程度の丸太がすっぽりはまっており、そのために側溝



の役割を果たさず、何10kgもある側溝のふたが流され、行方不明となっていた。泥は採石も混じり、コンクリートのような堅さで、作業は思うようにすすまず、重機でやらないと不可能だと感じた。しかし、人間の力はすごい。こつこつと崩し、地道に作業を続けると、不可能であると思った側溝が見事につながった。午後の2時間で50mも作業ができなかったが達成感はあった。先が遠い作業であるが、地元の方が声をかけてくれることで勇気が湧き、明日への活力となる。



2日目からは、大船渡港の阿部長さん。社長が「従業員の解雇はしない。再起をめざす。」という報道がされたところであり、津波が押し寄せた映像を何度も見た地でもあった。重機により一畳分の断熱材を細かく破碎されているものを、袋詰めする作業であったが、断熱材に腐敗した魚の身がこびりついて、とにかく異臭を放っていた。ハエも異常なまでの数がいて、払う意味がなかった。

作業をすすめても、片付いているのかが分からないほどの量で、午前中が終わっても達成感を味わうということはない。まだまだ、社長が言う再起までには多くの日数がかかる。自分たちの作業は、社長をはじめとする従業員全員と地元の方々が再起までに過ごす時間の、ほんの一瞬であろう。達成感を味わおうとしている自分が、いかに浅はかな思いを抱いていることかを感じた。それでも、3日間の作業で、断熱材はほぼ片付けが終了した。人間の力、そしてその力の結束はすごいと実感した。



作業の中日に、被災地の視察を行った。場所は、被害の大きかった大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市であった。運転手の柏崎長英さんの解説付きでの視察となった。柏崎さんも被災者であった。使われていない小中学校の校庭は、瓦礫の山。道路には、乗り上げた船がそのまま放置され、民家の庭先にも船が乗り上げていた。復興への道のりの長さを改めて実感した。大槌町の駅前には、アルバムの1ページと実印が道路に落ちていた。ほんの一瞬で、あまりにも多くのものをのみ込んだ津波の恐怖を実感するとともに、やりきれない思いと怒りに似た感情を覚えた。実際、発する言葉がない。視察のバスの中は、時間が過ぎていくごとに無言となっていた。



大槌町:大槌駅は跡形もなく…



陸前高田市:水没した野球場

後半は、物資の搬出・搬入作業を行った。

大船渡市立盛小学校は、大船渡市の高台にある小学校であるため、津波の直接的な影響は受けていない。たいへんきれいな学校であった。実際に体育館に入ってみると、大量の支援物資が備蓄されていた。校庭には、仮設住居が建ちはじめ、校庭を使用できなくなる児童のために、体育館を使用できるようにしたいということであった。この体育館の物資の搬出先は、市民体育館や大船渡港付近の大テントであった。支援物資を必要としている人たちに配布していかなければならないことを考えると、備蓄されているものを、また他の備蓄する場所に移動する作業は、矛盾を感じるものであった。それでも、この体育館を盛小の子どもたちが使用できるようになれば、きっと喜んでくれると思い、必死になって作業をすすめた。体育館の前に、放課後児童クラブの施設があった。子どもたちは、手や足をつかって大きな絵を描いたようで、「きゃっきゃっ」言いながら体を外で洗っていた。子どもたちのはしゃぐ声をしばらく聞いていなかったのが、心癒される時間となった。やはり、子どもたちの存在はすごいと改めて感じた。

第11次連合ボランティアとして、岩手での復興支援活動を行ったが、被災された方々の話を直接聞き、現地の状況を自分の目で見て、いかに3・11がすさまじかったのかが今までよりも理解できた。また、100日たっても、未だこの状況なのかということも感じる事ができたし、内地の方との復興に対する温度差も正直感じてしまう場面もあった。そして、期間途中で暗い気持ちで落ち込んでいく自分の存在もあり、その姿を冷静に見つめる自分もいた。しかしながら、着実に復興にむけて前進している。家族を失っても、陸前高田市長は、前をむいて必ず市の復興をさせるという強い気持ちで、今も奮闘中である。自分にできることは、本当にわずかである。それでも、やれることはやっていくしかない。現地を離れたら、気持ちも離れてしまったということがないよう、現地を離れても、心はつないでおきたい。

貴重な、貴重な10日間であった。